

■ 座談会の記録 ■

地域の歴史を学ぶこと

(出席者) 西木 浩一・富山 謙一・武藤 功・福山 智美

(司会) 宮澤 歩美

1. 地域の歴史との関わり

司会 本日は、新たな国分寺市史編さんに市民協力員としてご参加いただいている武藤功さんと福山智美さん、国分寺市教育委員会の前教育委員の富山謙一さん、そして近世・近現代部会長の西木浩一さんの四名をお招きいたしまして、「地域で歴史を学ぶこと」をテーマに対談をお願いいたしました。皆様、どうぞよろしくお願ひいたします。

では、早速対談に入っていきたいと思います。国分寺市は、皆様ご存じのとおり、武蔵国分寺がありますし、歴史が非常に色濃く残るまちです。歴史公園があったり、史跡、歴史関係のイベント、ボランティアの活動も盛んに行われております。市民の方々が地域の歴史に触れる

機会が多いというのが、この国分寺市の特徴であると思います。そこで、まず史跡ガイドとして活動をされております武藤功さんにお話をいただければと思います。武藤さんお願いします。

武藤 ご紹介いただきました、市民協力員の武藤と申します。よろしく申し上げます。今ご紹介があった史跡ガイドと市史についてお話をしたいと思います。今回三つぐらい考えてきました。史跡ガイドのご紹介と、あと私の個人的なお話になってしまのですが、私と国分寺の歴史についてのお話、あと最後に市史編さんにどのようなことを望むかということをお話ししたいと思います。

最初に史跡ガイドについてご紹介したいと思います。正式名称は国分寺市史跡ガイドボランティアということ

になっています。この中で、皆さん武蔵国分寺跡へ行かれたことがない方はいますか。皆さん行かれたことがありますよね。武蔵国分寺跡の特徴として、七重塔跡が遠くて離れている。尼寺も離れている。史跡の駅おたカフエのところへ行っても、塔跡に行くのはちよつと大変なのです。迷子になって行けなかったりとか、尼寺へ行つたことがない人はたくさんいると思うのです。でも、史跡ガイドに連れていってもらうと、塔跡にも尼寺にも行けます。そうすると尼寺で版築はんちくも見られます。もういいことだらけなので、史跡ガイドを活用していただきたいと思っています。

史跡ガイドには、二つの利用法がありまして、予約便と待機便があります。予約便は、大人数、例えば一〇人ぐらいで行くときに、電話して予約するとガイドがついてくれるという至れり尽くせりのものです。待機便は大体三日に一日ぐらいしかやっていないのですが、一〇時から一時と一時から二時ぐらいの間なのですが、ふらつと来られた方でも、主に武蔵国分寺跡資料館の中が多いのですけれども、お話をしてくれます。資料館に行かれたときはぜひとも史跡の駅長さんに史跡ガイドあり

ますかと聞いてもらって、ガイドを受けてください。とても役に立ちます。

資料館に入ってもパネルや説明がたくさんあって、各展示室のつながりとか、どういう目的でこの資料があるのかとか、この資料があるおかげで何が分かったのかというのは分かりづらいのですけれども、ガイドさんがいるとそこら辺説明してくれるので、とても分かりやすいと思います。ぜひとも史跡ガイドをご利用ください。

二つ目に、個人的な話なのですが、私も国分寺の歴史についてお話ししたいと思います。国分寺市には国分寺市ふるさと文化財愛護ボランティアという活動があつて、史跡ガイドとか調査とか普及等の分野があり、今はやっていないのですが、私は以前に調査分野をやっていました。国分寺市の古文書にインデックスをつける作業をやったことがありました。ほんとうに古文書は大変でした。明治時代だと文法は今に近いのですが、いろいろな方のくせ字があるので大変でした。古文書を読んでいると、私も国分寺生まれ国分寺育ちなので、知っている農家さんとかいるわけです。あそこのおじいちゃんのおじいちゃんぐらいの人の名前が出てきて、そういつ



武藤 功氏

(近世・近現代部会市民協力員)

た古文書を目にするとすぐ歴史が身近に感じられました。

また、国分寺市では令和六年度から「国分寺学」というのを推進しています、先日「国分寺学」の授業をやってくれたということで第二小学校に行ったのです。そうしたら、廊下に二小の歴史がずらっとパネル展示してありまして、最初に「里仁」と書いてある額がありました。第二小学校は里仁学舎というのが始まりなので、それを見たときに、ああすごいな、歴史というのは今でも息づいているなど感じました。あと、校長室へ行くと校長室に歴代校長先生の額があるのです。そうすると、初代の

校長とか市史に出てきているような方がいらつしやるので、そこもまたすぐ身近なものだなと感じました。

もう一つ、第三小学校のことを言いましたか。以前「国分寺学」の話で行ったときにも、第三小学校はもともと国分寺小学校という名前になったかもしれないのだよという話をしたりとか、あと三小の北側には貫井村分水が流れていて、南側には国分寺村分水がある。分水に囲まれた、本当に水に囲まれた学校なのだよと言うと、子どもたちがまた目をきらきら輝かせていました。来月、新しい市庁舎でパネル展示をするのですが、そのときにも小学校が出てきます。先ほど申し上げたように、里仁というのは二小につながるところで、第一小学校の前身は最勝学舎といました。もともと明治時代に文部省のほうから学校をつくりなさいと言われてたくさん学校ができてしまったのです。その反動でおおざっぱに言いますと、大正時代になると一村一校ぐらいにしなければ。国分寺小学校という名前の小学校、正確に言うと国分尋常高等小学校というのですけれども、それを大体市の中心、今でいう第一中学校の辺りにつくったのです。でも、あまり東のほうは遠いから、今のお寺さんのところにあ

った最勝学舎を第一分教場とした。西のほうも遠いので里仁学舎があつたところを第二分教場にして、その名前が残つて一小、二小となつて、三小は国分寺小学校でもよかつたのだけれども三にしたと。ということ、たまたま三なのだよという話をする子どもたちはえらい喜んでいました。

三つ目も私の個人的な話なのですが、私は現在、観光協会のお手伝いもしているので、観光協会についても歴史を調べてみました。実は一般社団法人こくぶんじ観光まちづくり協会ができたのは昨年なのですけれども、その前の国分寺市観光協会という名前だつた観光協会は、昭和五四年（一九七九）、今から四五五年ぐらい前にできたそうです。その当時の文書は意外に残っていました、市役所内にあるのですが、目的が観光の振興。それはそうだと。あと、事業として幾つかあるのですけれども、史跡や文化財の保存もやっていたそうなのです。医王山最勝院国分寺の関係者に聞いたところ、境内に国分寺町観光協会と書いてあるベンチがあつたらしくて、だとすると国分寺町の時代からあつたのかなと。そうするともう六〇年以上昔なのかなとも思ったりしました。

このように私にとって国分寺の歴史というのはすごく身近なものなのです。皆さんかかると思うのですけれども、国分寺の歴史を身近なものと感じられるというのは私にとってはすごく幸せなことだし、皆さんもきっと幸せだなと思われるかと思います。できたら私だけではなくて国分寺の市民の方、多くの方が国分寺の歴史をより自分のものと感じていただけるのが一番いいのかなとも思いました。

ちよつと長くなつてしまいましたが、私が新しい国分寺市史に望むことをお話ししたいと思います。二つあるのですけれども、まず一つは、武蔵国分寺跡という有名な史跡もあるので、在野の研究者の方が結構いると思うのです。市史というやはり大学の先生、偉い方々が書かれると思うのですが、できたらそういう在野の方々とも仲よくして、そういった観点も持ちながらやっていただけるといいかなと思いました。

二つ目は、私が史跡ガイドをやっていて何に注意してお客さんに、市民の方にお話ししているかということ、お客さんの立場にたつて歴史を説明したい。国分寺跡に関しては、身近なものとして。例えば埋蔵文化財に携わる

方々は日々発掘しているわけです。発掘されたものは歴史的事実として研究者にとつては結構ぞくぞくする楽しいものですが、一般市民の方にとつては「何じゃそれは」みたいなことが多いと思うのです。それを市民の方に興味深く楽しく面白く説明できたらいいなと。その観点でいうと、市史には事実だけではなくてストーリー的なものも入れてもらえるといいのかなと思っています。前回の市史ができてから時間が経っていますので、新しい事実もたくさん分かっているとしますし、あと多摩地区の、例えば江戸時代の研究も進んでいると思いますので、そこら辺も昔と違う観点で書けるのかなと。そういった期待を市史には持っています。

司会 武藤さんありがとうございます。史跡ガイドやこくぶんじ観光まちづくり協会の歴史など、幅広い、大変国分寺愛にあふれるお話をいただきました。国分寺には武藤さんのような生まれも育ちも国分寺という方がたくさんいらっしゃいますが、反対に最近引っ越してこられた新住民の方もたくさんいらっしゃいます。福山智美さんも国分寺に引っ越してこられた新住民の一人です。福山さんは国分寺の歴史にご興味をお持ちで、武藤

さんと同様に協力員として市史編纂事業にもご協力をいただいております。ぜひ、新しい住民の一人として福山さんにもお話をさせていただければと思います。国分寺のまちや市の歴史、史跡等についてどのような印象をお持ちでしょうか。

福山 市民協力員の福山と申します。一〇年ぐらい前に国分寺に引っ越してきました。国分寺がどのようなところか全く分からなくて引っ越してきたのですが、引っ越してきたら武蔵国分寺ですとか、東山道武蔵路ですとか、お鷹の道ですとか、歴史を感じる場所や史跡などが身近にたくさんあるなというのを感じていました。自分



福山 智美 氏
(近世・近現代部会市民協力員)

の子どもが小学生のときに学校の行事で史跡巡りというボランティアとして参加したことがありました。子どもたちに付き添って一緒に史跡を巡ったことが地域の歴史に興味を持つきっかけになりました。この近くに武蔵国分寺跡資料館があるので、そこで子どもたちと一緒に資料を見て、お話を聞いて、国分寺というのはいいところだなと感じました。

それから、国分寺では歴史を知ることができるイベントを多くやっているように思います。今回お話するにあたって少し調べたのですが、今日から始まっているのですが、武蔵国分寺跡資料館のほうで謎解きビンゴというイベントをやっていて、小学生とか中学生以下だとクイズに正解するとプレゼントをいただけるというのがあるので、行ってみたいなと思いました。

私がいろいろなイベントに参加して感じたことは、国分寺という地域は、当時の人々の誇りで、自慢の場所だったのではないかと想像し、国分寺がより好きになりました。歴史を知って思いをはせ、普段の生活では考えもしなかった世界に触れ、日々の喧噪けんそうからいったん頭をリセットできる感じもあって歴史を知るとは自分に

って新鮮でした。と同時に当時の人たちが大事に残してきた史跡や歴史を未来に伝えるお手伝いを少しでもできたらと感じるようになりました。

これからも国分寺の歴史に興味を持って学んでいこうと思っています。

司会 福山さんありがとうございました。

2. 教育現場と市史の編さん

司会 教育現場との連携が非常に大事だということを西木さんのご講演でお話していただき、先ほどの武藤さんのお話にも「国分寺学」がありました。「国分寺学」は、地域に親しみ、地域に学び、地域を考え、地域に貢献することを目的とした学習で、今年度から開始されました。子どもたちが国分寺市の歴史や文化について学び、考える機会というのにも増えていると思います。こういった「国分寺学」ですとか教育現場の中に、史料編さんや市史編さんの成果をどのように還元していくかというのは重要な課題であると思います。そういった点について、前教育委員の富山さんに教育現場の観点からご意見をいただ

ければと思います。

富山 それでは、小学校、中学校で地域の歴史学習をどんなふうに扱っているかお話ししたいと思います。まず、小学校一年生、ぴかぴかのランドセルを背負った子どもたち。一年生の授業には生活科というのがあるのですが、その中でもう既に国分寺の歴史に触れていきます。ただ、まだ一年生ですであらましといいますが、自分と学校の間にどんなものがあるのか、それを見て気づいたところを発表し合う、その程度です。

本格的に社会科学を勉強するのは小学校三年生です。三年生には『わたしたちの国分寺』という副読本があります。これは大人が読んでも楽しいですよ、本当に。子ども

6 国分寺市をもっと深く知るために

歴史のまち 国分寺

国分寺市は、日本列島の中でも、古くから人々が住み歴史のあるまちのひとつです。今から約1250年前には「武蔵国分寺」というお寺が建てられ、その名前が市名のものになっています。1997年（平成9年）、きちょうな赤米のいねが国分寺市の標で見つかりました。「武蔵国分寺種赤米」とよばれ、2015年（平成27年）にはふたたびさいばいが始められました。この赤米は給食などで天平メニューとして取り入れられたり、市内の小学生がだっくこく体験をしたり、多くの人に知ってもらえるようにくふうしています。

武蔵国分寺跡は、1922年（大正11年）に国指定史跡に指定され、2022年（令和4年）に指定100周年をむかえました。



▲標の武蔵国分寺のイメージ



100周年記念教育推進マップ



▲天平メニュー 国分寺ごはん



▲国分寺市立国分寺小学校



▲七重塔



▲日本多摩住宅長瀬門

128

「歴史のまち 国分寺」
（社会科副読本『わたしたちの国分寺』）

もたちはこの本を基にしながら勉強をしていきます。具体的に言いますと、資料編に「玉川上水と国分寺」という項目があり、崖線上の人が住めなかったところに用水が通って村ができたということを学んでいくのです。また、飢饉が起きて、多くの人が亡くなってしまう。そのときに、川崎平右衛門が活躍した。それを調べてみようとなります。さらに最後のまとめのところの「国分寺市をもっと深く知るために」、「歴史のまち 国分寺」という項目で国分寺ができた頃の様子や理由を勉強します。それだけではなくて、「科学のまち 国分寺」で、実は宇宙開発の始まったまちなのだとか、新幹線が生まれたまちなのだよということを学習します。小学校三年生ですので、まだ国分寺のあらましというか概要というかとば口ですよね。子どもたちはそれを意識づけられています。

国分寺がすごいのは、先ほど司会からもあったのですが、「国分寺学」を小学校、中学校、九年間を通して勉強するのです。地域の歴史的な事象というのを「国分寺学」を通して学んでいきます。中学生の終わる頃には、日本の教科書には大仏建立や国分寺の建立、それから新

田開発、玉川上水、そして先ほどの宇宙開発、新幹線、そういったことが全ての歴史の教科書にきちんと載っています。ですから、国分寺の子どもたちは小学校一年生の段階から日本の歴史の重要な部分を自分で歩いて見て触って、その実感を基にしながら九年間を通して自分形成を行っていくという、非常に恵まれた環境にあるところで勉強をしているということが言えると思います。

そういう中で、学校ではどんな子どもたちを育てたいのかなということを話したいと思うのですが、やはり国分寺の歴史を知ることを通して国分寺はこういうまちなのだ、こういう歴史があり、世界に誇る文化があるという実感、そして、そういうところに親しんで、愛着を持



富山謙一氏
(国分寺市教育委員会前教育委員)

って、そこで生活していることに誇りを持つ。そういう子どもに育ってほしいなと学校では考えています。そして、そういう子どもたちはきつと国分寺を大事にするだろう。子どもたちがこのすばらしい国分寺の担い手に育ってくれるだろう、そういう思いが学校にはあります。

先行き不透明なこの時代にいろいろなことがあると思います。国分寺はこんなにすてきなまちなのだ。そこで生活し学習、勉強してきたのだ。そういう思いはどんなつらいことがあってもたくましく生きる力、背中を押してくれる力になると思っ、この地域の歴史学習を進めているわけです。

次に、市史編さんに期待することですが、やはり専門的な知識をきちんと入れた市史というのは子どもたちには大変難しいです。また、歴史の勉強は苦手だということ子どもにもいます。なぜと聞くと、覚えることがいっぱいあるからという声があります。そこで、現場の先生は難しいことを一から覚えさせるよりも、子どもの気づきとか思いとか、あるいは何で、どうして国分寺をつくったの、そんな疑問や知的好奇心、そういうものを大事にして指導を進めています。そういった現場の先生の思いを受け

止めた、いわゆる子ども版というのでしょうか、子どもにも分かる、子どもが興味関心を持てる。そして、なぜ、どうしてという知的好奇心を持てるような市史が求められているのではないのでしょうか。

例えば今ここにこんな資料があります。一ページ開きますと、『江戸名所図会』というのが載っています。江戸時代の名勝が図絵になっているこれです。さあ、これを見て気づいたことを挙げてみよう。えっ、畑だよ。畑の上に大きい岩があるよ。それをわざわざ見に来ている人がいるのだね、なんていうことが、子どもたちに見つけさせると出てくると思います。学習としては、ではここで見学している、訪ねてきた人と土地の人が何か話をしているよね。もしこの尋ねてきた人がこんな大きい礎石の上にどんな建物があつたの、何で造つたのと質問したら、君はどう答えると子どもに発問してみてもいいかがでしょうか。子どものときからこの国分寺の建立については詔から始まつていろいろな勉強をしていますよね。そうすると、子どもの中にある考えがまとまつて、そして人に伝えようという気持ちが出てくるのではないのでしょうか。そんな工夫がどこかでされていて、子ども

自身が自ら発見する。自ら問いを出す。そしてそれをまとめて、人に伝えていく。そんな配慮が編さんの中にあつていいのかな。そんなことを期待しています。

司会 富山さん、市史編さんの課題をご提示いただき

まして、ありがとうございます。ご紹介いただきました社会科副読本の『わたしたちの国分寺』については、市史編さん室も今年度から一緒になつて編さんを進めておりますので、今いただいたお話を盛り込めるようにしていきたいと思います。

それでは、今までのお話を受けて西木さんにお話をいただければと思います。よろしくお願いします。

西木 どうもありがとうございます。市民協力員に早速手を挙げていただいたお二人からお話をいただきまして、やはりこの地域のベテラン、地域をよく知り尽くしている方が入ってくださいたというのもとても心強いですし、それから富山さんは新住民といつてももう十何年いらつしやるのですね。でも、元々ここが生まれ故郷ではないという方にも加わつていただいて、お子さんとともにいろいろな経験してその中というお話もありましたけれども、フィールドワークとか、やはりその場所を

見るというのが市史編さんのワークシヨップとかの中でもポイントになるのかな、大事になってくるのだろうかなと思いました。

私も駅と職場とたまに飲み屋ぐらいで、あまりよく国分寺の中を歩いていなくて、これからもっと自分自身もいろいろなところを見ながら、そういうワークシヨップ的なものや、見学会的なものを自分たちの調査と絡めながら実施して、自分たちも深めるし、そういう成果を皆さんに還元できるような機会を早い段階からつくつていきたいなと思いました。

それから、教育現場での取組ですけども、これは市史編さんの成果を子どもたちに分かりやすくするだけではなくて、子どもたちがこういう疑問を抱くだろうなということは、歴史学の課題でもあるのです。我々歴史研究者というのは、さも分かったような文章はいくらでも書けるのです。僅かしか資料はないのに、さもこうですよということはいくらでもテクニクでやるのですけど、素朴な疑問は意外と分かっているのです。だから、例えば新田開発や飢饉といったときに、幾つか媒介するものがないと子どもは多分理解できないですよ。飢饉

といったってそもそも何を食べていたのだろう。お米がなくなったのですか、豚肉がなくなったのですかとかという疑問から始まって、例えば芋とかがあったり、飢饉のときに備える食べ物があつたり、それすらもなくていいよ本当に亡くなる人もいる、そういう部分というのは、実は歴史学でそんなに分かっているのです。生活史の根幹みたいなところを素朴に聞かれると意外と分からないことだらけなのです。やはりそういう素朴な疑問、プリミティブにそもそもこれが分からないということの多くは、実は歴史学自身にとっても課題なのです。そういうことをともに学び合いながら、こちらから下ろすという発想ではなくて、酌み取っていきながら研究を進めていきたい。そういう関係性が築けたらいいかなとお話を伺って感じていました。

司会 西木さんありがとうございます。

むすびにかえて ―市史編さん事業の展望

司会 まだお時間がありますので、地域資料の掘り起こしというところでお話ができればと思うのですが、西

木さんから地域資料の掘り起こしは大変重要であるというお話がありました。今、市史編さん室でも、前回の市史編さんで見せていただいた古文書ですとか民具のほかに、新しい資料を探しているところです。西木さんのお話にもあったように、古文書や民具だけではなくて写真ですとか音声データ、映像ですとか、多種多様な歴史資料を探しています。もしこれは資料なのかなとか、こういうものがお家にあるのだけれどもということがあればぜひ市史編さん室までご一報いただければと思います。

それから、市民の方々への還元という意味でも講演会などを市史編さん室で企画をしているところです。市報でまた今後お知らせをいたしますが、一二月から三月に古文書、くずし字を読むという講座を企画しておりますし、一二月七日と来年一月一三日には歴史講演会を行います。一二月七日には、NHKの「日本人のおなまえっ!」にご出演されていた森岡浩先生のご講演、それから一月一三日には、同じくNHKの「チコちゃんに叱られる!」にご出演されている新谷尚紀先生の講演会が予定されております。多くの皆様にぜひご参加いただければと思います。

それでは、最後に本日の講演や、今までのトークセッションを受けてご感想などをお一言ずついただいて終わりにしたいと思います。では、武藤さんお願いします。

武藤 繰り返しになりますが、史跡ガイドとして新しい市史に期待することを述べたいと思います。それは感動をプラスしてほしいという要望なのです。私、ふるさと文化財課には度々行くのですけど、文化財課の職員さんは日々発掘などを通して歴史的事実を発見しているのです。でもそれは学術的なもので、一般的な市民の方からしたらちよつと冷たかったり縁遠かったり、分かりづらいというものが多いのです。そういったものを市民の方がどうしたら理解してくれるか。利用される方と歴史的遺物を結びつけてあげるようなガイドを心がけているのです。なかなか難しいですけども、そういった中で、古い市史もとても参考にしています。古い市史はすごく厚いですから、あれを全部覚えたらもうガイドなんか完璧にできてしまうのですが、あれを見ていろいろ感じて、これをお客さんにどう伝えたらお客さんが感動してくれるかというのを私たちは常に考えています。ですので、市史は正確なものでなくてはいけけないので



意見交換をする参加者

難しいとは思いますが、感動できる部分が入った市史であってほしいなど。もしくは読んだ人が感動できる市史であってほしいなと思っています。新しい市史にはたくさんさんの大きな期待を持っています。本日はありがとうございました。

福山 今日みなさまのお話を聞いて、より一層国分寺の歴史に興味を持ちました。これからいろいろ学んでいきたいと思っています。本日はありがとうございました。

富山 もう一つ市史に期待することなのですが、子どもたちの考え、これが深まるとともに世界に広がっていくような、そういう役割を果たしてくれたらなという思いが私自身の中にあります。例えば新幹線を見たときに、昔々、明治の始めにはレールから枕木から全て一式を海外から輸入していました。そして、現在を見ると、イギリスで日本製の新幹線が走っているのだ。こういう学びの広がりにつながりですよ。あるいは、大仏建立というのを見たときに、修学旅行に行けば奈良の東大寺で大仏を見ますね。総本山とのつながり、全国六八のまちなある国分寺とのつながりが見えてきます。

そのように地域の歴史を学んだときに、それが日本全

体、世界全体に広がっていて、互いに成長しているのだということが、子どもたちの気づきの中に深まっていて、広がっていったらいいな。簡単に言うとな国分寺の空を見たときに、日本とつながっている、世界とつながっているのだと。だから、例えば武蔵国分寺跡で出土した瓦のひとつに葡萄唐草模様のあしらわれた瓦がありますよね。同じ文様があしらわれたものは、奈良にもあるし、ギリシャのパルテノン神殿にもありますよね。そのように学んだことがつながって広がっていくということから、子どもの認識を深める、広める、そういうところを市史編さんに期待しています。

西木 ありがとうございます。とても期待されているので頑張らないといけないと思います。例えば玉川上水と水車の話でも、江戸時代には、水車で挽いた小麦を江戸の間屋を通して売っていました。しかし、近代以降になると江戸の周辺の間屋をすつ飛ばして横浜に持つていくとするのです、多摩の農民たちは。横浜に直接小麦とかを持ち込んでかなり大きな利益を得ようとして、江戸周辺の間屋たちと大変な戦いをするのですけれども、これは近代という新しい、世界とのつながりの中で起き

た変化が多摩地域にも出てきたものです。いろいろな豊かな視点というのが当然持てると思いますので、今おっしゃったようなことを意識しながらやりたいと思います。

それから、環境とか持続可能性みたいな発想というのは、三〇年前にはまだ萌芽的にしかなかった。それが教育現場の中でも当たり前のように今、入ってきていると思うのです。例えば開発から発展の過程の中で、獲得したものでなくてはなくて、失ったものもあるわけですよね。獲得したものと失ったものとのバランスとして現在があって、ではこの将来どうするのかということ。ちょうど私が扱う近世・近現代部会というのは、いつてみれば日本の伝統社会が形成されて、それが発展して変質していく。そして、もうぼぼぼ解体にある。そういう現代です。ただ発展だけではないし、発展してきたすばらしい側面と何か失ってきた側面と、両方捉えないといけない。そういうことも教育の現場とか、普通の生活者としてのいろいろな発想、そういうところから学びながら叙述していかないといけないのだらうなと強く感じています。そういう意味でも、我々が得た知識を教育現場に下ろす

という意識ではなくて、やはり一緒に考えながら、課題を突きつけられながら進んでいければいいかなと思います。ありがとうございます。

司会 それでは、これで「地域の歴史を学ぶこと」についてのトークセッションを終わりにしたいと思います。皆様、どうもありがとうございます。

(出席者) にしき こういち 東京都公文書館課長代理
近世・近現代部会長

とみやま けんいち 国分寺市教育委員会
前教育委員

むとう いさお 近世・近現代部会
市民協力員

ふくやま ともみ 近世・近現代部会
市民協力員

(司会) みやざわ あゆみ 市史編さん室職員

【開催情報】

市制施行60周年記念 東京都公文書館・もとまち
公民館・市史編さん室連携歴史講座

テーマ…地域の歴史を学ぶこと

日時…令和六年一〇月二六日(土)

場所…東京都公文書館研修室

市に関する歴史資料や情報を探しています

充実した市史を作るために、国分寺に関係のある資料や記憶・情報などを探しています。資料の閲覧・撮影・調査などにご協力いただける方、昔のお話を聞かせていただける方は、市史編さん室までご連絡ください。また、これは資料かな?と思った時もお連絡ください。

お問い合わせは市史編さん室まで。

○古文書・絵図・地図など

○市に勤務(在学)されていた時の資料

○市ゆかりの人物の資料や情報

○市内で撮影された写真・映像、音声記録

○市が登場する文学・芸術作品などの資料や情報

○自治会町内会・青年団・消防団などの記録や書類

○古いチラシ・パンフレット

○日記・手記、戦時中の体験記録など

○昔から地域で行っている行事などに関する記録

